

ソ連 80 年代前半期の核戦争小説について

越野剛

1. 序論—核戦争に対する 80 年代前半の危機意識の高揚について

本論では核戦争を題材にした三つの SF 小説（カザンツェフの『氷の再来』、アダモヴィチの『最後の牧歌』、ルイバコフの『救済の第一日』）を比較する。これによって核兵器による人類滅亡の危機というテーマがソ連の文学においてどのように扱われてきたかという大きな問題を検討するための手がかりとしたい。カザンツェフの小説は 1960 年代にいちど発表されたものだが、改作版が 1981 年に出された。アダモヴィチとルイバコフの作品の発表はチェルノブイリ原発事故（1986 年）と時期が重なったことで話題になったが、執筆されたのは事故が起きるよりも前である。1980 年代前半に 3 人の作家が同じテーマに関心を抱いた背景には、核の脅威がきわめて現実味を帯びた時期だったということがある。そうした時代の状況について以下で簡単にまとめてみたい。

西欧では 1979 年に NATO が中距離核戦力（INF）の増強を決定し、アメリカでは 1980 年にソ連への強攻策を主張するレーガン大統領が登場する一方で、ソ連は 1979 年にアフガニスタン侵攻を開始した。これによって 1970 年代の米ソのデタント（緊張緩和）が破れて、「新たな冷戦」が始まった。欧州大陸が核の戦場になるのではないかという危機感が高まり、80 年代初頭にはオランダ・ドイツ・イギリス・フランスなど西欧各国で反核平和の市民運動が高まりを見せる。1979 年 3 月のスリーマイル島事故に起因する反原発運動もこれを後押しした。米国の科学者カール・セーガンのイニシアチブで 1983 年にワシントン DC で開かれた国際会議をきっかけにして、核戦争後の人類の暗い未来を予想する「核の冬」の理論が有名になった。第 3 次世界大戦を描いた TV 映画『ザ・デイ・アフター』がアメリカで作成されて話題を呼んだのも同じ年である。

ソ連および東欧においても 80 年代前半には西欧の動きに呼応するかたちで核戦争への危機感が高まった。前述のルイバコフが脚本を書いた『死者からの手紙』（1986 年）やタルコフスキー監督の『サクリファイス』（1986 年）はどちらも核による人類滅亡をテーマにした映画であり、やはり同じ時期に撮影されている。1982 年 6 月にはモスクワの知識人を中心に 11 人の発起人が外国の報道機関を集めて記者会見を行い、「米ソ間の信頼醸成を目指す団体」（モスクワ信頼グループ）の発足を宣した³³。グループのメンバーは様々なセミナーを開催したり、街頭で平和を求めるアピールに署名を求めたり、デモンストレーションやハンガーストライキを行ったりした。西側の同種の市民運動に比べると活動の規模は小さなものだったが、当局の規制が厳しい中での非公式団体の活動として注目に値する。モスクワ信頼グループの活動はレニングラード、キエフ、ミンスクなどソ連邦の各地で呼応する動きを生み出し、モスクワ内でも様々な非公式グループと連携を持った。とりわけモスクワ・コンセプチュアリストの一派である「ムホモール（ベニテングタケ）」のアーティストたちとの関係があったことは興味深い³⁴。80 年代初頭の西欧で盛り上がっていた反核平和運動が、同時代

³³ EduArd Kuznetsov, “The Independent PeAce Movement in the USSR” in Vladimir TismAneAnu, ed., *In SeArch of Civil Society: Independent PeAce Movements in the Soviet Bloc* (New York: Routledge, 1990), pp.54-70..

³⁴ EduArd Kuznetsov, “The Independent PeAce Movement in the USSR”, pp.62-63. ムホモールとモスクワ・コンセプチュアリズムについては以下を参照。鈴木正美「モスクワ・

のモスクワの知的エリートにとって一種のモードになっていたとも考えられる。

しかしながら、80年代の後半にペレストロイカの波に乗って各種の非公式団体の活動が急速に活発になっていく一方で、反核平和運動だけはひっそりと勢いを失っていく。ソ連において核兵器反対の動きに参加したのは大都市の知識人の一部に限られ、西欧のように大きな規模に達することはなかった点は否めない。80年代前半の新冷戦期にあって非公式団体の活動は厳しく制限されていたことはもちろんだが、だからこそ運動の主たる目的が反戦平和よりもむしろ民主化や人権擁護に向けられてた面もあった³⁵。世界平和協議会などを通じて西側の市民運動と東側の公式平和団体（ソ連平和委員会など）が一定の共闘関係にあり、モスクワ信頼グループなどの非公式団体の存在が宙に浮いてしまうというねじれた現象も生じていた³⁶。80年代後半にはチェルノブイリ事故の影響からソ連各地で大規模な反原発の市民運動が組織され、これが反核平和運動の一部を引き継ぐかたちとなった。しかし原発反対の市民運動もあまり長続きすることはなく、地方の自治権拡大の要求や民族共和国のナショナリズム運動に吸収されてしまう傾向があった。ドーソンによれば反原発運動はしばしばナショナリズムの「隠れみの(surrogate)」として機能する場合さえあったという³⁷。

2. カザンツェフ『氷の再来』(1963-1981年)

【あらすじ】北極海の氷を溶かしてシベリア北岸の航行を可能にしていたソ連の誇る核融合炉「水中太陽(подводное солнце)」が不意に活動を停止した。物理学者ブーロフは海中にある未知の物質が核反応を抑止しているのではないかと推測し、海底火山から噴出する原物質「B体(Б-субстрация)」を発見する。そのころアメリカの資本家たちは左翼勢力の世界的な躍進を恐れ、アフリカの紛争に介入して原子爆弾を投下する。この場面の描写は広島・長崎の光景をほうふつさせる。一方でソ連の物理学者たちは発見されたばかりの「B体」を戦場に導入し、原子爆弾の爆発を止めてしまう。核兵器の使用が無意味になったため、軍需産業に依存していたアメリカの経済は破綻する(「アンチ核爆発」)。しかし資本家たちは使用価値のなくなったミサイルを買占めて、「B体」を搭載して太陽に向けて発射する。「B体」のせいで太陽内部の核融合反応が抑制され、地球には「氷河期」が再来する。資本家たちの作った秘密組織「SOS」は、ソ連を初めとする社会主義陣営に対して、自由経済を受け容れるようにと脅しをかける。ソ連の物理学者たちは世界中の学者に呼びかけ、「B体」と逆の性質を持つ反=原物質「A体」を見つけ出し、「氷河期」を終わらせようとする。物質創造の過程を再現するため、カフカス山脈の地下にある空洞に膨大なエネルギーが送り込まれ、小型の太陽に似た人工火山が作り出される。「A体」は得られたが、実験に携わったブーロフたちは致死量の放射能を浴びてしまう。瀕死の物理学者を救うため、癌の病因を解明したという高名な学者が探し出され、損なわれた遺伝子を分子レベルで治療する実験が成功裏に行われる。人類は核戦争に続いて癌からも解放されたのである。やがて「A体」を搭載したロケットが太陽に送られ、「氷河期」は終わる。

アレクサンドル・カザンツェフ (Александр Казанцев, 1906-2002) はスターリン期

コンセプチュアリズムの美術』『平成8年度冬季研究報告会報告集：スラブ・ユーラシアの変動、その社会・文化的諸相』北海道大学スラブ研究センター、1997年、314-325頁。

³⁵ 人権擁護活動で著名なアンドレイ・サハロフがゴーリキー(現ニジニ・ノヴゴロド)市に流刑されていたのがちょうどこの時期(1981-86年)である。

³⁶ EduArd Kuznetsov, “The Independent PeAce Movement in the USSR”, pp.65-66.; 吉川元「ソ連圏の市民運動と「民主的平和」」『修道法学』10(2)、1988年、347-382頁。

³⁷ JAne I. DAwsOn, Eco-NAtionAlism: Anti-nucleAr Activism And NAtionAl Identity in RussiA, LithuAniA, And UkrAine (DurhAm And London: Duke University Press, 1996)

からソ連崩壊後までの長期にわたって活躍した作家である。ベストセラーとなった出世作『燃える島』(1941年)などの初期作品は、SF版の社会主義リアリズムともいべき「近標的ファンタスチカ фантастика ближнего прицела」³⁸に属するが、その後も時代状況に合わせて様々な作品を残している。北極海の開発を描いた「極地の克服 Полярное прогивостояние」三部作は1940年代から70年代にかけて何度も書き直されている。金星を舞台にしたカルト的SF映画『火を噴く惑星』(1962年)の脚本も書いている。縄文式の遮光器土偶が宇宙服であるとか、ツングース隕石が宇宙船だったというような疑似科学的言説の普及にも大きな役割を果たした³⁹。ストルガツキー兄弟に対して敵対的な『若き親衛隊』社のSF作家グループの重鎮的存在であったこともあり、ボリス・ストルガツキーのセミナー⁴⁰出身者が大きな影響力を持つ現在のロシアSF界ではその評価はきわめて低い⁴¹。しかしソ連時代の重要なSF作家であったことは間違いなく、文学史においてカザンツェフを正しく位置づけ直すことが必要となるであろう。

『氷の再来』は北極海の開発を描いた「極地の克服」三部作の最終部にあたる。作品内の時系列では第一部にあたる『水中太陽』(1952-70年)は、海底に設置する核融合炉とユーラシア大陸の北岸に並行して延びる堤防によって、北極海の環境を改造する過程が描かれる。第二部の『友情の橋』(1941-84年)はソ連のムールマンスクと北米のアラスカをつなぐ海底トンネルの建設がテーマになる⁴²。『氷の再来』が書かれたのは近標的ファンタスチカの束縛が解かれ後であるためか、その内容は前二作と比べるとかなり奔放で変化に富んだものになっている。最初に出版されたのはキューバ危機(1962年)の直後であり、核戦争の危険性がリアルなものとなったという点では、作品の改訂版が出た1980年代初頭と状況が共通している。表題の「氷」とは資本家の陰謀で地球を襲う「氷河期」を表すと同時に、「雪どけ」が終わって「冷戦」が始まるというレトリックともつながっている。

物語は複数の登場人物の視点が次々に入れ替わって展開する。壮大な科学的仮説を発案する野心的物理学者ブーロフ、思春期の悩みを日記に書きつづるうちに事件の語り手となる少女、100万ドル獲得を夢見てハードボイルド風の日記を書きなぐるアメリカ人の青年記者、旧教徒のモロゾヴァ夫人に憧れる亡命ロシア系の美人スパイのエ

³⁸ ソ連のSF作家は遠い未来のユートピアではなく、現実の共産主義建設に近いテーマを選ぶべきだとする理論。30-40年代に支配的な影響力を及ぼした。1957年のエフレモフのユートピア小説『アンドロメダ星雲』によってソ連SFは「近標的ファンタスチカ」の束縛から解放されたとされる。

³⁹ 橋本順光「デニケン・ブームと遮光器土偶＝宇宙人説」吉田司雄編著『オカルトの惑星—1980年代、もう一つの世界地図』青弓社、2009年、85-110頁；越野剛「ツングース事件の謎—消えた落下物をめぐる物語」一柳廣孝・吉田司雄編著『ナイトメア叢書⑧天空のミステリー』青弓社、2012年、91-98頁。

⁴⁰ 「若き親衛隊」社によるSF出版の独占およびボリス・ストルガツキーのセミナーについては本論集の宮風論文を参照。

⁴¹ カザンツェフについては次のような評価すら見受けられる。「ソ連SF史の中の忌まわしき人物であり、その果たした役割は、わが国の生物学の《発展》におけるレイセンコの役割と比較できる」。Энциклопедия фантастики: кто есть кто, под ред.

Владимира Гакова, Минск: Галаксиас, 1995, С.281.

⁴² 両作共に何度も書き直され、題名も変化しているため、書誌情報は複雑なものとならざるをえない。第1部は『北の防波堤 Мол северный』(1952年)、『極地の夢 Полярная мечта』(1956年)、『水中太陽 Подводное солнце』(1970年)、第2部は『北極にかける橋 Арктический мост』(1941-46年)、『友情の橋 Мост дружбы』(1984年)と改作されている。

レーナ、珍奇な発明品が大好きなアメリカ軍需産業界の若きリーダー、マフィアと手を組んだ老獪な新聞王、資本家の一族であることに自己嫌悪するモーガン財閥の令嬢などである。スパイ小説・冒険小説的な要素が目立ち、陰謀や恋愛のプロットが目まぐるしく展開して飽きさせない。こうしたイデオロギー小説にありがちなことだが、概して真面目で自己犠牲的なソ連側の登場人物よりも、善悪の入り混じった個性的な資本主義側の人物の方が魅力的に描かれている。

カザンツェフの他の多くの作品でも言えることだが、自然改造のモチーフが随所に現われる。北極海の氷を溶かす原子炉や大陸間を結ぶ海底トンネルの他に、カフカース山脈の地下深くに建造される人工火山、木星に核弾頭を撃ち込んで第二の太陽を作る「ペトルルカ計画」、地球の軌道を太陽に近づける「イカルス」計画など大掛かりなものが多い。冒険的な実験プロジェクトの危険性を示唆する懐疑派の科学者は自然の力に屈服するものとして否定的に描かれる。きわめつけは氷河期の再来によって凍りついた地面を地球上の全人類による集団作業で叩き割ろうとするプロジェクト「十億の亀裂 Миллиард трещин」であり、スタハノフ主義的な英雄労働者の熱狂をほうふつさせる。小説のクライマックスで大事な役割を果たす癌の遺伝子治療の技術は、悪人を DNA のレベルで善人に生まれ変わらせる人格改造手術の可能性を示唆している。人間の悪は何らかの合理的な手段で消滅できるはずだというカザンツェフの楽観的な観点がよく現われている。終章の瑣末なエピソードのひとつで悪の黒幕の新聞王が癌の治療のついでに人格改造手術を施されそうになるが、むりやり善人にさせられることを拒絶して癌による死を選ぶ。この新聞王の反抗的選択は、ユートピア的な予定調和に対抗して人間の実存に関わる問いを投げかけているようにも読めるが、もちろんそれはカザンツェフが意識して想定したものではないだろう。

核戦争の危機をテーマにしながらも、作品はおおむね楽観的な調子で書かれている。人類滅亡に対する悲観的な危惧は屈折したかたちでのみ表現される。たとえば亡命ロシア人のスパイであるエレーナは科学の進歩が原子爆弾を作り出すことを批判して、「もしわたしがローマ法王だったら物理学者をみんな教会から破門するわね。焚書を逃れた核物理の本を読んだ罪に対しては火刑を導入したいところよ」と語る。それに対して物理学者ブーロフは「人類の救いは知識を拒むことではなく、さらなる高度な知識を得ることにあるのです」とあくまでも楽観的な態度を示す(1部3章2節:110)⁴³。エレーナは「第5の天使がラッパを吹いた。するとひとつの星が天から地上に落ちてくるのが見えた。その星に底なしの井戸を開く鍵が与えられた」と黙示録(9章1節)を引用して核戦争による終末を予言する。後の場面でアメリカの資本家が落とした核爆弾にB体を発動させる際に、ブーロフは黙示録の続きをもじって唱える。「しかし井戸の底から大きなかまどのような煙は上らず、井戸の煙によって太陽と空が暗くなることもなく、さそりのように人を刺すイナゴが煙から現われることもない」(2部1章2節, C.158)。登場人物による黙示録のテキストの自由な改変は、人類に役立つよう自然を改造できるという楽観的な態度を象徴しているといえよう。

人類滅亡の危機が示唆されるもうひとつの箇所は、核戦争によって惑星ごと滅んだとされるパエトン星(Фазтон)について語られる場面である。「もっともパエトンがどうして爆発したかなんて分かるわけがないでしょう。もしかしてパエトンの文明は宇宙に飛び出すくらいだから、原子力をも知ったのかもしれない。そして自然な結末...つまり核戦争にまで至ったわけね」(2部3章3節:275)。現在では小惑星帯となっている火星と木星の間にかつてもうひとつの惑星があったという仮説がある。1949年に彗

⁴³ 以降の小説テキストからの引用はそれぞれ以下の版により、()内に頁数を記す。*Казанцев А.П. Леды возвращаются*, М.:Молодая гвардия, 1981; *Адамович А. Последняя пастораль*, М.:Современный писатель, 1989; *Рыбаков В.М. Письмо живым людям*: Сборник, М.:Ермак, 2004.

星の研究などで有名なソ連の天文学者セルゲイ・オルロフが消滅した惑星をパエトンと呼ぶことを提案した⁴⁴。このエピソードは小説の中ではいささか唐突に登場する印象があるが、パエトン仮説自体はソ連の SF 作家の間ではよく知られたアイデアであり⁴⁵、カザンツェフにはこれを主題にした『パエトン人 Фазты』(1971-73 年) という長篇もある。

核戦争という科学の発達をもたらした黙示録的不安は、核戦争を不可能にする B 体の発見によって克服される。B 体を悪用して地球を「氷河期」に陥れようという陰謀に対しては、B 体の作用を無効にする A 体が発見される。致死量の放射線を被爆した主人公たちには、遺伝子治療という科学的な救済手段が考え出される。カザンツェフの小説は科学に対する楽観的な信頼に満ちており、現代科学の進歩がもたらす危機はさらなる科学の進歩によって必ず解決される。悲観的な観点はジェンダー的あるいはイデオロギー的な他者（亡命ロシア系美人スパイ）の言葉として語られたり、遠い過去の異世界（パエトン星）の出来事として設定される。1980 年代前半にこの小説が再刊行された背景には、現実の核戦争の危機を訴えると同時に、あくまでソ連側の正当性と楽観的な展望を示す狙いがあったものと思われる。

3. アダモヴィチ『最後の牧歌』（1987 年）

【あらすじ】 米ソの全面核戦争のせいで地球は滅亡するが、絶海の孤島で一組の男女が生き残る。男はベラルーシ人のソ連原潜艦長、女は国籍も民族も不明である。二人はアダムとイブのように、全裸でのどかな生活を送っている。やがて「第三の男(Третий)」である米国の軍人が島に流れ着く。男たちは米ソの過去の対立を水に流し、互いのピストルを海に捨てることで「武装解除」する。しかし女は新しく現われた男に心惹かれて、彼と暮らすことを選ぶ。絶望した主人公から見ると第三の男は放射能のせいで不能になっているはずで、人類が子孫を残すためには自分が女と結ばれなくてはならないと考える（冷戦時のイデオロギー的な自己正当化のパロディ）。そしていったんは海中に捨てたピストルを探し出し、決闘を挑んで第三の男を倒す。しかしその間に女は汚染された海で泳いで被爆してしまう。やがて放射能の嵐が島を襲い、人間に残された最後の安全な土地も滅びさる。

アレシ・アダモヴィチ Алесь Адамович (1927-1994 年)は、ベラルーシ出身の文学者だが、カザンツェフやルイバコフとは違って SF 作家ではない。少年期にパルチザン部隊に入ってナチスドイツと戦い、戦後は自らの体験を基にした戦争文学のジャンルで知られるようになる。ドイツ軍によるベラルーシの民間人の虐殺を描いた映画『炎／628 Иди и смотри』(1985 年)の原作者であり、シナリオも書いている。レニングラード包囲戦に関するグラニンとの共著『封鎖・飢餓・人間 Блокадная книга』(1979 年)もよく知られている⁴⁶。

ある文章で作家自身が書いているところによれば、人生において体験した三つの創作的源泉として、第二次世界大戦やスターリン批判と並んで 80 年代の核戦争の危機が挙げられる⁴⁷。アダモヴィチは国連の白ロシア代表部に勤務していた 80 年代初頭か

⁴⁴ パエトン（もしくはフェイトン）はギリシア神話のアポロンの息子の名前。

⁴⁵ ソ連 SF 作家の生活と交流を描いたニコライ・トーマンの『SF 論争』(1966)では、パエトン仮説がありがちな SF アイディアの例として挙げられている。ダルコ・スーヴィン編『遙かな世界果てしなき海』早川書房、1979 年、227-240 頁。

⁴⁶ アダモヴィチについては以下を参照。越野剛「核時代の文学：アレシ・アダモヴィチと大江健三郎」『スラヴ学論叢 6 号、2003 年、88-96 頁；越野剛「ハティン虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶」『地域研究』14-2 号、2014 年、75-91 頁。

⁴⁷ 「あちらには祖国戦争と第 20 回党大会。こちらには、今まで体験したことのないほどのあからさまで残酷な姿をあらわした核時代の真実、目の前に口を開けた底なし

ら核兵器反対の発言を積極的に行っている。たとえばあるソ連の原潜艦長にインタビューした際には、敵国の核攻撃を受けたとしても自分であれば決して報復のボタンは押さないと声明し、後にソ連国内の保守派から轟々たる非難を浴びた⁴⁸。本論で取り上げる『最後の牧歌』の執筆もそうした言動と深く関わっている。皮肉なことに小説が完成したのとほぼ同時期にチェルノブイリ原発事故が発生したため、完成した原稿には「放射能の Минск Минск радиоактивный」と書かれていたという。事故の後にアダモヴィチは被害者救済のために精力的な活動を開始した。事なかれ主義の行政官僚を非難し、隠蔽された事故のデータをマスコミで暴露した。1989年にソ連人民代議員大会へ選出されると、ゴルバチョフ書記長に対してベラルーシにおける放射能汚染の惨状を訴える発言を行っている。

アダモヴィチの『最後の牧歌』では「筋書き сюжет」と「選択 выбор」というキーワードがしばしば登場人物によって口に出される。孤島に生き残った人々の運命は「偉大なる劇作家 Великий Драматург」の書いた筋書きに沿って演じられる芝居に見立てられる。主人公自らが自分を劇の登場人物と見なして、自分たちが演じる劇がどんなジャンルに属しているのか（たとえば牧歌など）と自問する。定められた「筋書き」はあっても、登場人物には自由意志による「選択」をおこなう余地が与えられており、芝居の結末は必ずしも人類の滅亡ではないのかもしれない。女はどちらの男を愛するのか。第3の男は本当に不能者なのか。海に沈めたピストルはふたたび見つかるのか。そして「わたし」は第3の男を殺すのかどうか。アダモヴィチの小説では筋書きと選択の連鎖があたかも可能性の迷宮ようになっており、不条理劇を思わせる核時代の危機的状況の中で、たとえ世界の滅亡を回避できる正しい選択肢が存在しなかったとしても、選択を続けざるをえない人間の実存的な抗いが描かれている。

孤島に残された二丁のピストル（いったんは海に捨てられる）は、人間が3人しか生き残っていない状況下では、人類を滅亡させる力を持つ核兵器と同じ意味を持つという寓意は明らかだ。楽観的なカザンツェフの作品とは異なり、こうした限界状況の下ではどちらの側にも正当性はありえない。主人公はソ連を、「第3の男」はアメリカを代表している。それはあからさまなアレゴリーのようにも見えるが、実際には語り手の「私」はロシア人ではなくベラルーシ人、「第3の男」は白人ではなく黒人である。そのような入り組んだ設定からは、米ソのイデオロギー的対立だけではなく、南北問題や民族紛争への暗示も読み取ることができる。単に「彼女 Она」としか呼ばれないヒロインに関しては、あらゆる民族的・国家的な性格づけが意図的に省かれている。語り手が瀕死の女にささやく慰めの言葉「みんなもとどおりになるから大丈夫だよ Усё, усё вернецца, каханая мая!..」がここだけロシア語からベラルーシ語に入れ替わっており、小説中で人類が最後に発する台詞となっているのも示唆的である。戦争が起きるたびに大国の狭間で苦しんだ歴史を持つベラルーシの作家アダモヴィチのささやかな異議申し立てを見ることが出来る。

4. ルイバコフ『救済の第一日』（1986年）

【あらすじ】 全面核戦争が勃発した「ゼロ時間(Момент Ноль)」から一年が経とうとするころ、地上は防毒マスクなしでは出歩けない汚染された世界となっていた。「内閣(Кабинет министров)」と「参謀委員会(Комитет начальников штаба)」がそれぞれの地下壕に勢力圏を築き、生き残ったわずかな人々を支配している。地下に住む人々の間では謎の伝染病が蔓延するが、それが不治の病であることは隠されている。滅亡を間近にした人々の間で、救世主が現われたという噂が広まる。それは「地球 Земля」から来たと称する不

の崖つぶち」。Алесь Адамович, Отвоевались!, М.: Молодая гвардия, 1990, С.8.

⁴⁸ Алесь Адамович, Мы шестидесятники: статьи, М.: Советский Писатель, 1991. С.392.

思議な少年で、汚染された空気の中を平気で歩き回り、「ミュータント Мутант」とも呼ばれている。「参謀委員会」側では自前の食料や防毒用フィルターの備蓄が尽きようとしており、大気圏外の軍事衛星を利用して「内閣」の地下壕を攻撃し、その備蓄品を奪い取ろうと計画を立てる。衛星とコンタクトを取るため、「教授」と呼ばれる有能なプログラマーが鉱山の坑道から呼び出される。「教授」はかつてミュータントの少年を養っていたことがあった。一方で「内閣」側はその不思議な能力を利用するため少年を捕獲するが、少年は住民の生命を救うために「参謀委員会」の陰謀を予告する。軍事衛星との通信機の設置された管理塔で衝突が起り、「教授」は身を犠牲にして衛星から地上への攻撃を阻止する。少年は自分の無力さを嘆きながら荒野に向かい、ひとりの少女に放射能を免れる力を与える「奇跡」を行う。やがて夜明けとなり、救世主をもとめて人々が集まってくるが、何者かの銃弾が少年を撃ち倒してしまう。

ヴァチスラフ・ルイバコフ(Вячеслав Рыбаков, 1954-)は、ボリス・ストルガツキーのセミナー参加者のひとりである。80年代初めに核戦争テーマに興味を抱き、映画監督のロプシャンスキーと共同で映画『死者からの手紙 Письма мертвого человека』(1986年)のシナリオを書いた。この作業の過程で生れた着想を映画シナリオとは別個に生かしたのが核戦争テーマの三作品、『冬 Зима』(1987年)、『金曜の晩 Вечер пятницы』(1990年)、『救済の第一日 Первый день спасения』(1986年)である。発表時期は異なるが、どれも1984年に書かれている。その後も多くの作品を書いているが、最近では歴史改変小説 альтернативная история のジャンルに属する「ユーラシア・シンフォニー」シリーズが話題となった。ペテルブルグ東洋学研究所で中国古代史を専攻する研究者でもある⁴⁹。

わたしは突然変異を乞い願った。それが救済である。その理念は単純だ。われわれはロボットであり、ブリキのおモチャのように遺伝子の記憶をプログラムされている。(..)変異したプログラムを持つヒューマニストたちは以前から、暴力や殺人はいけなしいと言いつづけてきた。しかし実際にはそれはやってもよいことだったのだ。種に危機が迫るわけではないからだ。(..)しかし今やどんなものであれ殺人の試みは種そのものを殺しかねない。(..)プログラムはそんなことは計算に入れていなかった。われわれが水爆を思いつくなんてことは想定しなかったのだ。けれど言葉で人を変えることはできない。プログラムを取り替えなくてはならない。それもみんなの分をいっぺんにだ。(505-506)

これは『救済の第一日』からの引用で、軍事衛星の管理塔に住みついているマッドサイエンティスト風の男が語る奇妙な進化論である。人間の遺伝子は他者に攻撃的であるように最初からプログラムされている。核兵器の発明もその遺伝子のプログラムに沿ってはいるが、その使用は人類を滅亡させかねないものだった。核戦争を防ぐためには人間の遺伝子自体を進化させる新たな「突然変異 мутация」が必要である。それも単独で突然変異した人物(歴史上の偉人)が現われるのでは駄目であり、人類全体が一度に変化しなくてはならない。ミュータントの少年がもつ不思議な力もこの種の突然変異と見ることができるが、単独の傑出した能力者ではやはり世界の破局を救うことはできない。

興味深いことに、遺伝子レベルの改造で人間を道徳的に進化させるというアイデアはカザンツェフの小説と類似している。ただし『氷の再来』では黙示録の終末とい

⁴⁹ ルイバコフとその歴史改変小説については以下を参照。越野剛「現代ロシアにおける歴史改変小説とリアリティの問題について」『SLAVIANA』第21号、2006年、14-25頁；越野剛「現代ロシアの歴史改変小説における帝国イメージについて」松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学』第3巻、講談社、2008年、177-206頁。

う悲観的な未来像はマージナルな領域に押しやられて、楽観的な自然改造の世界観が前面に出ている。ルイバコフの小説ではむしろ悲観的なトーンの方が支配的であり、人格改造による核戦争の回避という手段は狂人の言説という屈折したかたちで表現されているに過ぎない。

カザンツェフにもアダモヴィチにも見られない要素として、自己の意志では制御しえない外的環境と対立するものとしてプライベートな領域が強調されていることがある。これはルイバコフの核戦争テーマ三連作すべてに共通する。『救済の第一日』の「教授」は軍事衛星を操作するほどの優秀な技術者だが、嫉妬深い妻との暮らしを優先して、一介の鉱山労働者として働いている。ミュータントの少年にも父親的な愛情を抱いている。『金曜の晩』は週末の夜の帰宅途上の語り手の意識の流れを淡々と描いた短編である。街角の風景を取り留めなくながめたり、妻や息子との関係について悩んだりしながら、最後にはちょっと核戦争の危機と人類の未来について思いをめぐらせもする。『冬』は核戦争によって環境が激変した世界に暮らす男の一日を描いている。シェルターで避難生活を送る男が小説の中で行うのは、赤ん坊の世話をすること、逃げ遅れた妻の死体を見つけ出して蘇らせようと無駄な努力をすることだけである。

『救済の第一日』と『冬』では人類の破局を救うかに見える超越的な存在が登場するにも関わらず、結果的には現状を変化させる力を持たないことが暴露されてしまう。ミュータントの少年は放射能を癒す奇跡を起こすが、人間の悪意によって銃弾に倒れる。『冬』に登場するキリストに似た人物は「核の冬」で凍え死んだ人々を蘇らそうとするが、妻を蘇らせようとする主人公の試みと同じように奇跡は決して生じない。

5. まとめ

本論文では 80 年代前半に核戦争が迫っているという危機意識の高まりを背景にして書かれた三つの核戦争小説を比較分析した。カザンツェフの『氷の再来』は資本家の陰謀による人類滅亡の可能性を描きながらも、あらゆる困難は人類の科学的進歩と社会主義の勝利によって克服されるという楽観的なトーンに包まれていた。アダモヴィチの『最後の牧歌』は出口のない悲観的な核状況を提示しながらも、自主的な選択能力を持つ人間の実存的な積極性だけは肯定しているように見える。しかし核兵器の圧倒的破壊力の前にはイデオロギー上の差異は意味を持たないと考える点ではカザンツェフの立場と大きく異なる。ルイバコフの『救済の第一日』は超越的な力を持つ存在ですら救済者とはなりえない悲観的な世界観に貫かれている一方、個人の力の及ぶかぎりの私的な領域が愛しいものとして示されている。一方で人類滅亡を回避するためにはすべての人間の遺伝子を改造しなくてはならないという観点において、志向性の全く異なるカザンツェフとルイバコフの間に奇妙な共通性が見えるのも興味深い。

カザンツェフ、アダモヴィチ、ルイバコフの作品世界の相違には、創作上の作風や生れた世代による意識の違いが反映しているだろう。カザンツェフは 1906 年、アダモヴィチは 1927 年、ルイバコフは 1954 年に生まれており、それぞれソ連の異なる世代に属する作家である。世代の差異が核戦争に対する認識にもたらす影響も興味深い。SF は作品内の論理に従うかぎりにおいて時間や空間を自由に操作できる文学ジャンルである。しかし人間の想像力は白紙から生まれてくるわけではない。むしろ自由で可塑性の高いジャンルであるがゆえに、空想が羽ばたくための出発点として具体的な時代の状況に依存する一面がある。1980 年代前半の核戦争の危機はそのような状況を準備したが、それに応える SF 的想像力の展開する方向は作家によって様々なものであった。